

『とほずがたり』にみる涙の表象——衣・身体性に関連して——

今 関 敏 子

キーワード・涙 泣く 袖 袂 身体性

要 旨

鎌倉期に生きた女性の自伝的作品『とほずがたり』には、涙の表象・泣く場面が群を抜いて多い。作品には、生まれる以前より後深草院の寵を得る運命が定められ、宮中の錯綜した男女の構図の中に翻弄され、後に御所を追放され、出家した類稀な人生が綴られる。このような悲劇的とも捉え得る内容に涙はつきものと考えられがちだが、他作品と比較するとそうは言い切れない。涙は表現手段として意図的に選ばれたのである。それは精神性ばかりではなく、衣の表出に関連して、身体性をも暗示している。ここに作品の特質はある。

1 はじめに

『とほずがたり』は日記文学にジャンル分けされる作品の中でも、群を抜いて涙の表象・泣く場面の多い作品である。

日記文学に共通する執筆動機が喪失であり、その多くが死という対象喪失であることを考えれば、涙の表象・泣く場面が多くとも不思議はないのだが、ジャンル全体を見渡すと意外にそうでもない。「涙」「泣く」「泣く泣く」の語例の比率も作品によって異なる。

仮名日記文学の嚆矢『土佐日記』には「泣く」の語例が4例、和歌に「涙川」が1例見出せるのみで、成人した男性が泣く記述はない。鎌倉期初頭の『たまきはる』は仕えていた三人の女院の死という対象喪失を執筆動機としながら、「泣く」は皆無、「泣く泣く」が2例、「涙」は1例に過ぎない。私家集にもジャンル分けし得る『建礼門院右京大夫集』や一人称の物語とも言い得る『うたたね』には「泣く」より「涙」が圧倒的に多い。『中務内侍日記』には「涙」8例、南北朝期の『竹むしが記』には「涙」6例、いずれも「泣く」は皆無である。

泣く場面の多い作品、『蜻蛉日記』^①『讃岐典侍日記』^②につい

ては既に論じたが、それぞれの「涙」「泣く」の表象は作品の特質を物語る。『蜻蛉日記』では、夫や子どもとの関係性の変容、それに伴う心情の変化が「涙」「泣く」の表現からあらためて明確になる。『讃岐典侍日記』は、堀河天皇崩御に際して号泣する宮廷女房たちの描写に独自性があるが、時間の経過にともなって涙の修辞表現が多くなることを見逃せない。描写・表現の変化に愛の対象としての亡き帝の意味づけが明らかになるのである。

以上のような現象は単なる偶然ではないように思われる。本稿では『とはすがたり』の涙の表象・泣く場面にいかなる特徴があり、執筆意図といかなる関連があるのかを考えたい。(なお、宮廷生活が背景の巻一―三を上巻、出家した後の巻四・五を下巻と捉えて論ずる。)

2 『とはすがたり』における泣く場面の特徴

泣くことに涙はつきものだが、『伊勢物語』『蜻蛉日記』『紫式部日記』『讃岐典侍日記』にみる限り、表現上「泣く」と「涙」は互換性が希薄である。「泣く」と表記された場合には声が伴うことが圧倒的に多い。^③

勅撰集、私撰集、私家集の例を見渡すと、全般に和歌表現

には「涙」の用例数は「泣く」をはるかに上回る。「泣く」はそのままだ表現されることは少なく「音をのみぞ泣く」などの修辞を伴い、また、動物の鳴き声に泣きたい気持ちを唱和させるのが常套である。

一方、「涙」は「泣く」に比べるとはるかに多様に表象される。また、和歌表現の特徴として、直接「涙」の語を用いずに、露、雨、雫等に譬え、袖や袂を濡らすものと捉える修辞は珍しくない。「涙」は、美化、劇化、異化されて重層的な詩的世界を構築するのである。

《和歌と散文》

『とはすがたり』全五巻に和歌は163首織り込まれている。そのうち「涙」の語を使用せずに涙を暗示するものは、巻一に6首、巻二に3首、巻三に5首、巻四に2首、巻五に5首ある。「涙」の語例に合せると16首、5首、9首、8首、11首、計49首となる。^④

『とはすがたり』では、散文における表現が和歌に融合している。たとえば、「袖」「袂」が涙、泣く行為を示すのは、和歌表現の常套であるが、『とはすがたり』では、むしろ散文表現に多い。涙に纏わる「袖」「袂」の語例を表に示すと次のようになる。() 内はそのうちの和歌の用例数。

『とほすがたり』にみる涙の表象

袂	9 (5)	4 (1)	5 (1)	3 (0)	4 (2)	25 (9)
袖	28 (11)	13 (4)	14 (4)	15 (6)	11 (5)	81 (30)
	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	計

中でも「袖の涙」という連語が散見する。表に示すと次のようになる。()内はそのうちの和歌の用例数。

袖の涙	7 (3)	4 (1)	9 (2)	6 (0)	4 (1)	30 (7)
関連表現		涙の袖1			涙の袖1	
	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	計

「袖の涙」も散文に多い。散文の語例23例中19例、和歌の語例7例中5例の主体は二条である。

しかし、和歌表現の「涙」の表象は、まったく散文と同様ではない。概して恋の歌には「涙」が多いが、詩的表現の「涙」は、修辞・誇張・象徴性がある特徴であり、現実には限らないのである。本稿では、二条自身の体験、二条が目にした泣く光景、涙する場面が記述される散文を優先して論じたい。

《「涙」「泣く」「泣く泣く」の語例・泣く主体・泣く理由》

「涙」「泣く」「泣く泣く」

『とほすがたり』全体の「涙」「泣く」「泣く泣く」の用例数を表に示すと、次のようになる。()内の上段は散文、

下段は和歌の用例数である。

涙	24 (168)	10 (91)	25 (196)	21 (174)	20 (146)	100 (7525)
泣く	9 (90)	2 (20)	6 (60)	0	0	17 (170)
泣く泣く	1 (10)	4 (40)	2 (20)	1 (10)	4 (40)	12 (120)
その他			涙河1 涙ぐむ1 酔泣き1	涙川3 涙がち1 涙もろさ1		
	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	計

「涙」の用例が圧倒的に多いのは一目瞭然である。下巻には「泣く」の用例が皆無である。また、和歌表現には「泣く」「泣く泣く」の用例が全くない。

泣く主体

散文部分に限り、「涙」「泣く」「泣く泣く」の主体を用例の多い順に表に示すと次のようになる。

涙	12	2	14	16	12	56
二条						
有明の月	4	5				
後深草院	3					
人々	1			1		
ささぎの女		2			2	
	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	計

計	足摺説話	稚児	父	人々	二条	有明の月	泣く泣く
1			1			3	卷一
4				1		1	卷二
2		1					卷三
1				1			卷四
4	2				2		卷五
12	2	1	1	2	2	4	計

計	稚児	ささがいの女	雪の曙	父	有明の月	二条	泣く
9			1	1		7	卷一
2		1				1	卷二
6	1				2	3	卷三
17							卷四
							卷五
	1	1	1	1	2	11	計

計	伏見院	親王將軍	比喩
16			
9			1
19		1	
17	1		
14	1	1	1
74			

泣く理由

「涙」「泣く」「泣く泣く」の理由は、「男女の間柄」(35例)と「人の死」(21例)が圧倒的に多い。

男女の間柄	人の死	主体	涙		泣く		泣く泣く		計	
	二条	その他の登場人物	11	10	4	6	4	0		19
その他の登場人物	二条	主体	6	10	1	1	1	2	8	13

上巻に集中する泣く理由・男女の間柄のうち、二条以外の登場人物の例19例中15例が有明の月の泣く場面である。

《『とはすがたり』にみる涙の表象・泣く場面の特徴》

涙の表象・泣く場面の特徴として、男女の間柄で流される涙が多いこと、涙の表現に袖と袂が多用されること、泣く人物として二条の次に有明の月が多いことを指摘出来る。また、和歌散文ともに、露に譬え、袖や袂を濡らすものとして表現されるなど、多様性、重層性を示している。

これらの特徴は、自ずと宮中における女性としての二条の位置を反映していよう。

3 宮廷生活の暗転

《晴の出発》

五巻にわたる作品の冒頭をみよう。

呉竹の一夜に春の立つ霞、今朝しも待ち出で顔に花を折り、匂ひを争ひてなみるたれば、われも人みななみにさし出でたり。苔紅梅にやあらん七つに、紅の桂、萌黄の表着、赤色の唐衣などにてありしやらん。梅唐草を浮き織りたる二つ小袖に、唐垣に梅を縫ひて侍りしをぞ着たりし。

(11頁)

新年を迎えた宮中。女房たちが着飾って出仕している。二条も一人前に晴れの衣を身に纏って列席した。初々しさに満ちた書き出しである。幼い頃より慣れ親しんだ宮中であるが、この年はそれまでとは違う正月であった。作品には書かれてはいないが、前年に二条は裳着を済ませたと思われる^⑤。大人の衣裳で迎える初めての新しい年。梅の形象と赤系統の色を主体にしたうら若い女性らしい華やかな衣裳である。ただし、屈託なく衣が叙述されるのは、冒頭のこの箇所に限られる。

《失意の衣》

裳着は結婚可能な年齢に達してから、相手が決まっについて、あるいは見当をつけて行なわれる場合が多い。作品の出発時

点の二条の場合、既に岩佐美代子が論述している通り、雪の曙（西園寺実兼）と婚儀の予定があつたと考え得る。

しかし、急転直下、事態は変ってしまった。晴れやかに出仕をしたその日のうちに、後深草院から「この春よりはたのむの雁もわが方によ」（12頁・今年からお前の娘を私にな）という申し出が父・源雅忠にあり、父がそれを承諾したからである。絶対権力には抗えない。

冒頭の晴着の次に作品に書かれる衣は、雪の曙からの贈り物である。院の意向を知った雪の曙から、「つばさこそ重ぬることの叶はずと着てだに慣れよ鶴の毛衣」（12頁・あなたと夫婦になることは叶わなくとも、せめてこの衣を身に着けて親しんでください）という歌を添えて見事な衣裳が届いた。

二条は、

よそながら慣れてはよしや小夜衣いとど袂の朽ちもこそすれ

(12頁)

（本論中の『とはずがたり』引用部には、「泣く」に実線、「涙」に太線、衣に関する表現に波線を付す）あなたの妻でもないのに着慣れてしまつてよいものでしょうか、ただでさえ悲しいのに、涙に濡れて袂が朽ちて台無しになつてしまつてしまうう——、と詠んで衣裳を返した。

この衣裳は岩佐^⑥の指摘するように、婚礼のために整えられたものであろう。希望は失意と悲しみに転じた。晴の衣は、涙

に朽ちる小夜衣^{せいやい}でしかない。身体を包む衣が「涙で朽ちる」のは、身体的接触を断たれたことをも暗示する。

雪の曙にいったんは返した衣裳だったが、「契りおきしころの末の変らずは一片敷け夜半の狭衣」(13頁・お約束したお気持ちが変わらないのでしたら、ひとりでお召しください)の歌とともに再び贈られてきた。二条は法皇の御幸の折に身に着けて雪の曙の意向に応え、院から頂戴したのか、と問う父をはぐらかしている。将来の秘めた関係をすでに衣は予兆している。

《衣が示す凋落のプロセス》

以後、衣をめぐっては辛い出来事が付き纏う。その資格もないのに二条が「三衣」を着て院の車に奉仕したため「女院同車」と噂されていると東二条院が抗議、二条の処置を後深草院に迫り、院が弁明するという一件があった。これは御所追放の伏線のひとつと読める。

卷三卷末にいたって、理由も告げられず御所退出を命じられる。

(上略) 今日や限りと思へば、よろづの草木も目とどまらぬもなく、涙にくれて侍るに、折節、恨みの人参る音して、「下の程か」と言はるるもあはれに悲しければ、ちとさし出でたるに、泣き濡らしたる袖の色もよそにする

かりけるにや、「いかなる事ぞ」など尋ねらるるも、問ふにつらさとかやおぼえて、物も言はれねば、今朝の文取り出でて、「これが心細くて」とばかりにて、こなたへ入れて泣きあたるに、「されば、何としたる事ぞ」と誰も心得ず。／大人しき女房達なども、とぶらひ仰せらるれども、知りたりける事がなきままには、ただ泣くより外の事なくて、

(202～203頁)

突然で動転して泣くばかり、雪の曙(恨みの人Ⅱ西園寺実兼)にも事情がわからない、慰めてくれる女房たちに対しても泣くより他に術がない。一目お顔をとり、後深草院に面会するが事態は絶望的であった。

練薄物の生絹の衣に、薄に葛を青き糸にて縫物にしたるに、赤色の唐衣を着たりしに、きと御覧じおこせて、「今宵はいかに。御出でか」と仰せ言あり。何と申すべく言の葉もなく候ふに、「来る山人のたよりには、訪れんとにや。青葛こそうれしくもなければ」とばかり御口ずさみつつ、女院の御方へなりぬるにや、立たせおはしましぬるは、いかで御恨めしくも思ひ参らせざらん。(203頁)

院は「退出するののか」と尋ね、着ていた衣の青葛の刺繍になぞらえて「練る山人があったら、また参内したいということか、そんな青葛なんてうれしくもないね」(部)と口ず

さみながら東二条院の方へ赴く様子、どんなに恨めしく思い申し上げたことか。泣き暮れた末に纏う青葛の衣は、冒頭の梅尽しの華やぎとは対極的である。

《権力構造と二条の位置》

二条の人生は生まれる以前から絶対権力者・後深草院の掌中であつた。院の寵を受けることは、避けられぬ運命だったのである。

寵を得た二条はやがて皇子を身籠るが、父はその誕生をみることもなく世を去る。もし、父が存命であつたなら、すべてが違つていたであろう。雪の曙の妻となることが出来たなら、異なる人生の展開であつたらう。

しかし、それは宿命的に許されぬことだつた。二条の母は少年であつた後深草院の元服の折の添臥しであつたと考えられる^⑤。後に雅忠の妻となつた初恋の女性の子の誕生を、後深草院は心待ちにしていた。数え年二歳で母を亡くした二条を、院は四歳より御所に上げて慈しみ、成長を待つて寵愛したのである。

后でもなければ内侍でもない、しかも後見のない二条の地位に制度上の保証はない。家のない女として宮廷に在つた二条は、制度外存在として数奇な生涯を送ることになつた。

婚約者であつたと推察される雪の曙と二条は、父亡き後、

密かな逢瀬を重ね、やがて女兒を出産。雪の曙のはからいで、院の皇子を早産したと偽つて危機を逃れた。その後、皇子の死という悲しみを経験する。さらに、院の弟君の高僧・有明の月（性助法親王）に思いを打ち明けられ、またしても秘密を持つ身となるが、これを知つた院は二人を保護する立場をとる。有明の子も二人（一人は有明の死後）出産している。院は龜山院や近衛大殿をも二条に近づける。

実は、二条をめぐる男女の間柄はすべて後深草院に掌握されている。秘密を持つ自由さえ二条にはなかつた。雪の曙の妻になることを知るや、二条をわがものにした院は、それ以降、雪の曙から目が離せなかつたであろう。しかし、黙認せざるを得ない。状況判断が的確で行動的な魅力ある男・雪の曙は、政治家としても有能で、院にとって手強い相手であつた。曙と密会の後、後深草院から文が送られ、歌が詠まれている。

うば玉の夢にぞ見つる小夜衣あらぬ袂を重ねけりとは

(65頁)

岩佐^⑥は「小夜衣」には「つま（褌・妻）重ね」、すなわち二人の男と契る意の暗示性のあることを指摘している。院は感づいていることを二条にほめかしているのである。しかし、介入はしない。雪の曙にわかるように二条に男性を近づけ、曙からの贈り物と知りつつ二条の衣を鶴飼に遣つてしま

うなど、間接的に妨害するにとどまる。曙は、表向きは秘密を貫き、身の危険をスマートに免れた。

有明の月は対照的である。院が有明と二条の仲を許したの
は寛大な処置のように見えて、二人を封じ込め、関係ごと支配しているに過ぎない。有明の死は自滅に等しい。錯綜した
関係を操るかのように院は楽しんでたが、曙が遠ざかり、
有明が世を去り、その微妙なバランスが崩れたとき、二条の
宮廷生活は終わった。

冒頭の十四歳の新年は、性愛の対象として後深草院を頂点とする権力構造の中で男たちに翻弄される出発に他ならなかった。子ども時代と決別して大人の衣裳に脱ぎ替えた衣の袖は始終涙に濡れることになるのである。

4 二条の涙と男たち

《後深草院》

和歌を除けば、院が泣く場面は作品を通じて少ない。二条が目にした例は、御嵯峨院崩御の折に1例、死を前にした二条の父雅忠と向き合った折に2例、また、有明の月と二条の仲を許した折に「涙ぐむ」例が1例あるのみである。しかし、後深草院の存在は二条をよく泣かせた。

光源氏と紫の上に模するような叙述の後深草院と二条の関

係は涙で始まる。新枕に二条は泣きながら激しく抵抗する。

起し給はで、いはけなかりし昔よりおほしそめて、十とて四つの月日を待ち暮らしつる、何くれ、すべて書き続くべき言の葉もなき程に仰せらるれども、耳にも入らず、ただ泣くよりほかの事なくて、人の御袂まで乾く所なく泣き濡らしぬれば、(中略)と、口説きて泣きみたれば、あまりに言ふ甲斐なげにおほしめして、うち笑はせ給ふさへ、心憂く悲し。(16〜17頁)

二条は、静かに涙するのではなく、院の衣を濡らすほどに泣きじゃくり声を立てて泣いているのである。あまりの幼さに院がお笑いになるのもよけいに情けない。

還御の後、院より、歌が送られてくる。

あまた年さすがに慣れし小夜衣重ねぬ袖に残る移り香 (18頁)

岩佐^①は、この歌には院の側から二条の亡き母への恋慕が重ねられることを指摘している。

次の日は容赦なかった。院は暴力的に二条を組み伏せた。それは次のように記される。

今宵はうたて情けなくのみ当り給ひて、薄き衣はいたく綻びてけるにや。 (20頁)

『とほすがたり』ばかりではなく、平安鎌倉期の物語も日記も、現代の小説や映画のように身体の接触を直接的には表現

しない。二条は一晩中泣いていた（「夜もすがら泣き濡らしぬる袖の上」21頁）。涙も衣も間接的な身体表現として実に重い。

そのまま院はさらうように二条を御所に連れて行く。道中は涙がとまらない（「つらさを添へて行く道は、涙のほかは言問ふ方もなくて、おはしまし着きぬ。」22頁）。院の寵を受ける身として新たな生活が始まる。慣れ親しんでいた御所は、それまでとは意味を変えた。先のことを思うと涙がとまらない（「また涙のみ暇なきに」22頁）。

御所では院と二条の間には次のような贈答歌が交わされている。

かくまでは思ひおこせじ人知れず見せばや袖にかかる涙を
 （院・23頁）

われ故の思ひならねど小夜衣涙の聞けば濡るる袖かな

（二条・24頁）

愛する人を思つて涙するという表現は和歌の類型である。二条詠の「小夜衣」は、表向きは後深草院の詠「あまた年…」に唱和する。あるいは雪の曙の存在が念頭にあろうか。

少女から大人への通過儀礼的な出来事を、「泣く」から「涙」へ表現を微妙に変容させながら、実に巧みに叙述していると見えよう。

《雪の曙》

雪の曙は泣かない男である。父・雅忠の死後、雪の曙が訪ねてきて、向き合つて話をする機会を得る。

昔今のあはれをとり添へて、「今年は常の年にも過ぎて、あはれ多かる。袖のひまなき。一年の雪の夜の九献の式、常に逢ひ見よとかやも、せめての心ざしとおぼえし」など、泣きみ笑ひみ、夜もすがら言ふほどに、明け行く鐘の声聞ゆるこそ、げに逢ふ人からの秋の夜は、言葉残りに鳥なきにけり。「あらぬさまなる朝帰りとや、世に聞えん」など言ひて、帰るさの名残も多き心地して

（46～47頁）

存命中の父が、二人の結婚の承諾をしていたことなど、昔のことを泣いたり笑ったりしながら雪の曙は語った。二条と雪の贈答歌には、「涙」「露」「袖の露」「袖の涙」が詠み込まれるが（注④参照）、曙が泣いた記述は散文ではこの箇所のみ。

そして、父の四十九日も過ぎた頃、雪の曙は二条を口説き落とす（「長き夜すがら、とにかくに言ひつづけ給ふさまは、げに唐国の虎も涙落ちぬべき程なれば、」51頁）。多難が予想される秘めた恋の幕開けにひとり涙しながらも、新たな運命へ二条は身を委ねていく。やがて曙の子を懐妊。密かに着帯するにつけても、皇子懐妊の折の父を思い出し涙する（「故大納言の「いかに」など思ひ騒がれし夜の事、思ひ出でら

れて、袖には露のひまなさは」(68頁)。そして、女兒を出産、早産と偽り、手際よく介助した曙が嬰兒を連れ去った。この時は声を押し殺して二条は泣いている(「袖の涙はしるかりけるにや(中略)人知れぬ音をのみ袖に包みて」(71頁))。泣かない男・雪の曙には他の男たちにはない笑いのエピソードがある。来訪した折に、二条が白酒を好むことを知った雪の曙は、

「かしこくも今宵参りてけり。御わたりの折は、唐土までも白き色を尋ね侍らん」とて、うち笑はれぬるぞ忘れがたきや。憂き節には、これ程なる思ひ出で、過ぎにし方も行く末も、またあるべしとおぼえずよ。(55頁)

うまい具合に今夜尋ねたものだ、唐土までも求めて白酒をお持ちしましょう、と笑う雪の曙(部)。二度と帰らぬ楽しい時間の共有。このような場面は他にない。

《有明の月》

有明の月ほど、よく泣いた男はいない。前述した作品中の涙や泣く表現に関する用例が、二条に続いて多いのが有明である。「袖の涙」30例中、24例は主体が二条であるが、有明の4例(すべて散文)はそれに次ぐ。命がけで二条に近づいた有明は逢瀬の度に泣くのである。

後白河院御八講の折、後深草院の還御を待っている間、有

明の月が昔語りなどをするうちに、二条に思いを打ち明けるという思いがけない展開になる。

(上略)のどどとうち向ひ参らせたるに、何とやらん、思ひの外なることを仰せられ出して、「仏も心ぎたなき勤めとやおぼしめすらんと思ふ」とかや承るも、思はずに不思議なれば、何となくまぎらかして立ち退かんとする袖をさへひかへて、「いかなる暇とだに、せめては頼めよ」とて、まことに偽りならず見ゆる御袖の涙もむつかしきに、(102頁)

まさしく涙の告白である。その後、院が病を得て、その延命供のために有明の月が参上する。この春、「袖の涙の色」を見せた人に二条は警戒はするが、ふとした折を捉えては求愛し、文を遣し返事を迫る。二条が「夢」と書き置くと、櫓の枝が投げられ、葉に歌が書いてある——「櫓摘む暁起きに袖濡れて見果てぬ夢の末ぞゆかしき」(107頁)。抗いつつ心惹かれていき、結ばれる結果となった。

(上略)「仏の御しるべは、暗き道に入りても」など仰せられて、泣く泣く抱きつき給ふも、あまりうたてくおほゆれども、人の御ため、「こは何事ぞ」など言ふべき御人柄にもあらねば、忍びつつ、「仏の御心の内も」など申せども叶はず。(108頁)

仏事の最中の破戒は有明の月の涙の密会である。二条も「後

夜の程に、今一度、必ず」という有明の言葉に従い、逢瀬の後、小袖を交換する。まさしく衣は身体性の象徴である。

(上略) 少しのどかに見奉るにつけても、むせかへり給ふ気色、心苦しきものから、明け行く音するに、肌に着たる小袖に、わが御肌なる御小袖を、強ひて「形見に」とて着換へ給ひつつ (108～109頁)

小袖の棲に「うつつとも夢ともいまだ分きかねて悲しさ残る秋の夜の月」と詠まれた陸奥紙の破片がある。切羽詰った思いで結願までたびたび密会を重ねたが、このまま続けるわけにはいかない。

夜もすがら泣く泣く契り給ふも、身のよそにおほえて、「今宵ぞ限り」と心に誓ひゐたるは、誰かは知らん。(中略) 泣く泣く出で給ひぬる気色は、げに袖にや残し置き給ふらんと見ゆるも、罪深きほどなり。 (117頁)

有明に別れを告げたが、起請文が送られてくる。そこにはいかに二条を恋い慕って涙に暮れているか(「夜はよもすがら面影を恋ひて涙に袖を濡らし」119～120頁)が書かれている。二条は「今よりは絶えぬと見ゆる水茎の跡を見るには袖ぞしをるる」(121頁)の歌を添えて送り返した。

しかし、これで終わりというわけにはいかなかった。再び会う機会があった有明はまたもや涙ながらに語り(「御袖の涙はよその人目も包みあへぬ程なり」158頁)、二人の会話の

内容を院に聞かれてしまう。有明の月はさりげなさを装うが、袖の涙は隠しようもない(「入らせ給ひぬれば、さりげなき由にもてなし給へれども、しほりもあへざりつる御涙は、包む袂に残りあれば、いかが御覧じ咎むらんとあさましきに、」159頁)。前述したように、後深草院は二人の仲を容認するのである。二条にとつても有明の月の面影が慕わしい。宿縁と覚悟する(「袖の涙に残る心地するは、これや逃れぬ契りならん」162頁)。「飽かず重ぬる袖の涙」のとどまるところを知らぬ関係に身を投じていく。

やがて、有明の子を懐妊、月満ちて生まれた男児を前に有明の月は「昔の契り浅からでこそ、かかるらめ」などと言って、「涙もせきあへず、大人に物を言ふやうに口説き給ふ」(187頁)のである。その後、有明の月は、自分の身が鴛鴦となつて二条の身体に入る夢(懐妊の予知夢である)を見たと言い、「あくがるるわが魂は留め置きぬ何の残りて物思ふらん」(190頁)という後朝の文を遣す。「物思ふ涙の色をくらべばやげに誰が袖かしをれまさると」(190頁)という二条の返事が最後になった。有明は病を得て不帰の人となる。

有明の死には稚児が泣き(192～193頁・194頁)、二条も悲しみと懐旧の涙を抑えきれない。年が改まつても涙と縁が切れない(194～196頁・198頁)。二条詠「恋ひ忍ぶ袖の涙や大井川逢ふ瀬ありせば身をや捨てまし」(201頁)の後、遺児に触れ、

有明に関する記述は終わる。その出逢いから死まで、涙に終始した間柄であった。

《男たちと涙》

後深草院は無論のこと、雪の曙も近衛大殿も、男たちには他にも生きる場があり、女性もいる。人生の彩りとして恋を樂しむゆとりもある。二条にとつては深刻で重大なことも男たちにはさほどではない。

しかし、泣く男・有明の月の恋情は、禁制を越えた魂の奔流である。泣いて訴える一途な情熱を向けられ、いわば共犯関係のように、身の危うさを二条も共有していた。果ては二人の仲を認める帝王の寛容という名の新たな支配に封じ込められる。先の見えない閉ざされた世界で身を焼くエロスの極致を涙は象徴していると言えよう。

子 敏 関 今

5 後深草院の存在の意味

《下巻の涙―上巻との相違》

御所を追われた二条は出家をした。巻四は、三十二歳になった尼姿の二条の旅立ちが始まる。

下巻に「泣く」の用例はまったく姿を消すが、「涙」の記述は少なくない。来し方を懐旧し、遊女に共感し、親王將軍

上洛の場面にも行き会い、遊義門院に出逢い、二条の墨染の袖はしばしば涙に濡れている。

「男女の間柄」が涙の主たる理由であった上巻と異なり、下巻の涙は「死」に対して流されることが最も多い。亡き人々の菩提を弔って生きる叙述に「涙」は切り離せない（清水山の鹿の音は、わが身の友と聞きなされ、籬の虫の声々は、涙言問ふと悲しくて」312頁、「峯の鹿野原の虫の声までも同じ涙の友とこそ聞け」313頁、「空しき面影は袖の涙に残り、言の葉はなほ夢の枕にとどまる。」314頁315頁、「する墨は涙の海に入りぬとも流れん末に逢ふ瀬あらせよ」316頁、「峯の嵐もやや烈しく、滝の音も涙争ふ心地して、あはれを尽したるに、物思ふ袖の涙を幾入とせめてはよそに人の問へかし」319頁）。

裳着同様、得度という通過儀礼の経緯は作品には書かれていない。成人女性としての宮廷生活は梅に始まり青葛に終わった。裳着以降、物議を醸し、悲哀と結びついた衣裳を墨染の衣に脱ぎ換えた。この過程に、身体性も表象される。性愛の対象から二条は降りたのである。下巻では、上巻で紙幅を大幅に割いて叙述された宮中で関わった男たちには言及されない。思い出の中にさえ登場しない。

しかし、涙の記述は後深草院に集中するのである。

《後深草院と再会》

二条三十四歳と思われる二月、石清水八幡宮で院に再会、
久々の逢瀬を持った。院は身に着けていた三小袖を「人知れ
ぬ形見ぞ。身を放つなよ」（260～261頁）と二条に賜わす。こ
れはとりもなおさず二人に間に身体の接触のあったことを示
唆する。院の心中を思うと「来し方行く末の事も、来ん世の
闇も、よろづ忘れて、悲しさもあはれさも、何と申しやる方
なき」（261頁）心情になる。小袖は墨染の下に重ねた。

重ねしも昔になりぬ恋衣今は涙に墨染の袖

空しく残る御面影を、袖の涙に残して立ち待るも（中略）

御面影は袖の涙に宿りて、御山を出で待りて、都へと北

へはうち向けども、わが魂はさながら御山にとどまりぬ

る心地して帰りぬ。（261～262頁）

さらに、二条三十六歳と思われる九月、伏見で院に再会、
感無量（「世を宇治川の河波も、袖の涙に寄る心地して275頁）、
涙を抑えきれない。

その嘆きこの思ひは、誰に愁へてか慰むべきと思へども、

申し表すべき言の葉ならねば、つくづくと承りゐたるに、

音羽の山の鹿の音は、涙をすすめ顔に聞え、即成院の暁

の鐘は、明け行く空を知らせ顔なり。

鹿の音にまたうち添へて鐘の音の涙言問ふ暁の空

心の中ばかりにてやみ侍りぬ。

さて、世もはしたなく明け侍りしかば、涙は袖に残
り、御面影はさながら心の底に残して出で侍りしに、

（275～276頁）

二条はこの再会で、仏道修行の女の身、頼る男も居たであ
ろ（「深く頼め、久しく契るよすがありけん」276頁）とい
う院の疑いに、身の潔白をきつぱりと弁明している。

幼少の昔は、二歳にして母に別れて、面影を知らざる恨
みを悲しみ、十五歳にして父を先立てし後は、その心ざ
しを偲び、恋慕懐旧の涙はいまだ袂を潤し侍る中に（中
略）御幸・臨幸に参りあふ折々は、古へを思ふ涙も袂を
潤し、叙位・叙目を聞く、他の家の繁昌、傍輩の昇進を
聞きたびに、心を傷ましめずといふ事なければ、さやう
の妄念静まれば、涙をすすむるもよしなく侍る故、思ひ
をもやさまし侍るとて、あちこちさまよひ侍れば、或る
時は僧坊にとどまり、或る時は男の中にまじはる。（中
略）さるべき契りもなきにや、いたづらに独り片敷き侍
るなり。（278～279頁）

旅の尼として男たちの中に交じりもしたが、そういう宿縁も
なかったとみえ、男女の契りを結んだことはない、と言
い切っている。

《後深草院崩御》

それから約十年。二条四十七歳の時、後深草院の病を知
る。ひとり心を痛めるもどかしさを二条は「夢ならでいかで
か知らんかくばかりわれのみ袖にかくる涙を」（300頁）と詠
んでいる。西園寺実兼（もはや雪の曙としての登場ではな
い）を訪ね、何とか面談叶い（「袖の涙も人目あやしければ」
（302頁）と気兼ねもしている）、実兼のはからいで最期の院に
「夢のやうに見参らする」（303頁）ことが出来た。そして、崩
御。伏見院が「御直衣の御袖にて御涙を払はせおはしましし
御気色」を「さてこそ悲しく見参らせ」（305頁）、何としても
御棺を一目と願う二条は履物が脱げたまま裸足で葬送の車を
追う。途中に山科中将の「墨染の袖もしぼるばかりなる気色」
を見て「さこそと悲し」と共感し（305頁）、痛む足で追いつ
けたが、見失ってしまう。

空しく帰らんことの悲しさに、泣く泣く一人なほ参るほ
どに、夜の明けし程にや、事果てて、空しき煙の末ばか
りを見参らせし心の中、今まで世に永らふるべしとや思
ひけん。（中略）

露消えし後の御幸の悲しさに昔に帰るわが袂かな

（306頁）

この後は、悲哀と懐旧の涙にくれる。御四十九日が近くなり、
仏事を聴聞して「頃しも九月の初めにや、露も涙もさこそ争

ふ御事ならめと、御簾の中も悲しきに」（308頁）と感じ、眠れ
ぬ夜に「古きを偲ぶ涙は、片敷く袖にも余りて、父の大納言
身まかりしことも、秋の露に争ひ侍りき。」（309頁）父の世を
去った悲しみに重ねて過ぐす。一周忌には「いつとなく乾く
間もなき袂かな涙も今日を果とこそ聞け」（317頁）と詠む。
形見の三小袖も供養の布施として手離していく。熊野にお
ける二条の歌、

あまた年慣れし形見の小夜衣今日を限りと見るぞ悲しき
（321頁）

について、岩佐は、「院の初夜詠に唱和するかのよう」に詠
じて「衣」をめぐる愛執の半生のとじめとするのである。」
と述べている。『とはすがたり』の作品構成の周到さを示す
指摘でもある。この過程にも涙が伴う（「夢覚むる枕に残る
有明に涙ともなふ滝の音かな」321～322頁）。
そして、三回忌。法華堂に新しい御影が安置されたのを拝
む。

袖の涙も包みあへぬさまなりしを、供僧などにや、並び
たる人々、あやしく思ひけるにや、「近く寄りて見奉れ」
と言ふもうれしくて、参りて拝み参らするにつけても、
涙の残りはなほありけりとおぼえて、

露消えし後の形見の面影にまた改まる袖の露かな

（326頁）

仏事の間涙が止まらない（すべて涙はえとどめ侍らざりしかば、」328頁）が、三回忌は節目である。「思ひきや君が三年の秋の露まだ乾ぬ袖にかけんものとは」（330頁）を最終歌に、短い跋文を付して『とはずがたり』は終わる。

《後深草院の存在の意味》

上巻で繰り広げられた人間関係の苦悩も運命の変転も、その要因は後深草院を頂点とした宮中という構造の中の女性としての位置にあった。無論、二条にはこのような近代的な意識は明確にはなかったであろう。しかし、寵愛され、理由も定かでなく御所を追われた無念さは消えない。院は絶対権力で二条を守り、縛り、そして捨てた。身分・地位は無論の事、この意味で後深草院は他の男たちと一線を画するのである。生きていくうちに、互いの真情を確かめる必要があった。それは石清水・伏見の再会で叶った。「後深草院あつての自己」という人生を受容した。その上でこそ崩御を受け入れ、菩提を弔うことが出来る。後深草院ゆえに作品の最後まで二条の袖は涙に濡れるのである。

6 おわりに

近代以前の人々の感情表現はきわめて自然であった。現代

ほど泣くことに対する制限はなかった。和歌表現に典型的なように、人々は涙を文化的に豊かに享受したと言い得る。たとえば、日記文学にジャンル分けされる作品に涙の表象、泣く場面が少なくとも、作者や周囲があまり泣かなかったということではない。書き手が書く素材として選択しなかったのである。『とはずがたり』は涙の表象・泣く場面が実に多彩である。作者二条自身の半生が涙と縁が深かったのも事実である。作者二条自身としての二条は、ふさわしい表現手段として意図的に涙を選択しているのである。

和歌は言うまでもないが、物語文学、日記文学に飲食が表現されることは稀である。平安鎌倉期の貴族階級は手付かずの自然から遠く離れている。都は剪定された人工都市である。生産に直接携わることのない貴族たちは、学問、芸術、芸能を尊び、美を価値とした。このような高度に洗練された文化を堪能した貴族階級は、生体・生命を直接維持することの表現を避けたのではあるまいか。

飲食同様、身体の接触を直接的に表現することもない。しかし、貴族同士には見えないところでは熾烈な政治闘争もあり、自然から離れるほど人間関係は複雑になる。宮中の男女の構図も錯綜している。その只中に生きた二条の類稀な半生は、身体を抜きにしては語れまい。

喪失の悲哀、哀悼、懐旧を表現する場面に頻出する「涙」

は、家なき女、権力構造の中の性愛の対象という存在性を表象する。精神性のみならず、「涙」が「衣」に関連して身体性を暗示する点に『とはすがたり』の特質はあろう。

(教授 日本文学)

注

本論中の引用は、新潮日本古典集成『とはすがたり』(福田秀一校注)に拠る。

① 今関敏子『蜻蛉日記』考―「涙」の表象・「泣く」場面から』『日記文学研究第三集』新典社 2009

② 今関敏子「王朝人の涙―泣く男・泣く女の文学表象」今関編『涙の文化学―人はなぜ泣くのか』青簡舎 2009

③ ②に同じ。

④ 卷一 16首

よそながら慣れてはよしや小夜衣いとど袂の朽ちもこそすれ

(二条↓雪の曙・12頁)

かくまでは思ひおこせじ人知れず見せばや袖にかかる涙を

(院↓雅忠・23頁)

われ故の思ひならねど小夜衣涙の聞けば濡るる袖かな

(二条↓院・24頁)

わが袖の涙の海よ三瀬河に流れて通へ影をだに見ん

(二条・44頁)

さらでだに秋は露けき袖の上に昔を恋ふる涙添ふらん

(院↓二条・45頁)

思へたださらでも濡るる袖の上にかかる別れの秋の白露

(二条↓院・46頁)

別れしも今朝の涙をとり添へて置き重ねぬる袖の露かな

(二条↓雪の曙・47頁)

名残とはいかが思はん別れにし袖の露こそひまなかるらめ

(雪の曙↓二条・47頁)

忍びあまりただうたたねの手枕に露かかりきと人や咎むる

(雪の曙↓二条・47頁)

秋の露はなべて草木に置くものを袖にのみとは誰か咎めん

(二条↓雪の曙・48頁)

帰るさは涙にくれて有明の月さへつらき東雲の空

(雪の曙↓二条・51頁)

帰るさの袂は知らず面影は袖の涙に有明の空

(二条↓雪の曙・51頁)

秋の露冬の時雨にうち添へてしほり重ねるわが袂かな

(二条・56頁)

思ひやれ過ぎにし秋の露にまた涙しくれて濡るる袂を

(二条↓院・57頁)

重ねぬる露のあはれもまだ知らで今こそその袖もしをるれ

(院↓二条・57頁)

君だにもならはざりける有明の面影残る袖を見せばや

(二条↓院・59頁)

卷二 5首

櫛摘む暁起きに袖濡れて見果てぬ夢の末ぞゆかしき

(有明の月↓二条・107頁)

今よりは絶えぬと見ゆる水茎の跡を見るには袖ぞしをるる

(二条↓有明の月・121頁)

はかなくも世のことわりは忘れられてつらさに堪へぬわが袂かな

(隆顕↓二条・135頁)

わが袖の涙言問へ時鳥かかる思ひの有明の空 (二条 140頁)

夢とだになほわかかねて人知れず押ふる袖の色を見せばや

(二条↓近衛大殿・151頁)

卷三 9首

つらしとて別れしままの面影をあらぬ涙にまた宿しつる

(二条↓有明の月・164頁)

憂しと思ふ心に似たる根やあると尋ぬるほどに濡る袖かな

(雪の曙↓二条・166頁)

憂き根をば心の外にかけそへていつも袂の乾く間ぞなき

(二条↓雪の曙・167頁)

契りこそさても絶えけぬ涙河心の末はいつも乾かじ

(二条↓雪の曙・167頁)

わが袖の涙に宿る有明の明けても同じ面影もがな

(二条・173頁)

わが身こそいつも涙の隙なきに何を偲びて鹿の鳴くらん

(二条・177頁)

物思ふ涙の色をくらべばやげに誰が袖かしをれまさると

(二条↓有明の月・190頁)

恋ひ忍ぶ袖の涙や大井川逢ふ瀬ありせば身を捨てまし

(二条・201頁)

たえず涙に有明の月

(院・223頁)

卷四 8首

旅の空涙にくれて行く袖を言問ふ雁の声を悲しき

(二条・251頁)

わが袖にありけるものを涙川しばし止れと言はぬ契りに

(資宗↓二条・252頁)

乾さざりしその濡衣も今はいとど恋ひん涙に朽ちぬべきかな

(二条↓資宗・253頁)

重ねしも昔になりぬ恋衣今は涙に墨染の袖

(二条・261頁)

何となく都と聞けばなつかしみそぞろに袖をまた濡らすかな

(女房↓二条・268頁)

立ち帰る波路と聞けば袖濡れてよそに鳴海の浦の名ぞ憂き

(常良↓二条・273頁)

かねてよりよそに鳴海の契りなれど帰る波には濡る袖かな

(二条↓常良・274頁)

鹿の音にまたうち添へて鐘の音の涙言問ふ暁の空

(二条・276頁)

卷五 11首

手になれし昔の影は残らねど形見と見れば濡る袖かな

(二条・291頁)

夢ならでいかでか知らんかくばかりわれのみ袖にかくる涙を

(二条・300頁)

露消えし後の御幸の悲しさに昔に帰るわが袂かな

(二条・306頁)

峯の鹿野原の虫の声までも同じ涙の友とこそ聞け

(二条・313頁)

する墨は涙の海に入りぬとも流れん末に逢ふ瀬あらせよ

(二条・316頁)

いつとなく乾く間もなき袂かな涙も今日を果とこそ聞け

(二条・317頁)

物思ふ袖の涙を幾入とせめてはよそに人の問へかし

今 関 敏 子

- あまた年慣れし形見の小夜衣こよえ今日を限りと見るぞ悲しき (二条・319頁)
- 夢覚むる枕に残る有明に涙なみだともなふ滝の音かな (二条・321頁)
- 露消えし後の形見の面影にまた改まる袖そでの露かな (二条・321頁)
(二条・322頁)
- 思ひきや君が三年の秋の露つゆまだ乾ぬ袖そでにかけんものとは (二条・326頁)
(二条・330頁)
- ⑤ 今関敏子『「とほすがたり」の通過儀礼』小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』竹林舎 2007
- ⑥ 岩佐美代子『「とほすがたり」における和歌と表現』女流日記文学講座第五巻『「とほすがたり・中世女流日記文学』勉強社 1990
- ⑦ ⑥に同じ。
- ⑧ ⑤に同じ。
- ⑨ ⑥に同じ。
- ⑩ ⑥に同じ。
- ⑪ 萩原さかえ(『「とほすがたり」の笑い』駒沢国文第39号)は、「癒しとしての笑い」の典型と述べている。
- ⑫ ⑥に同じ。